

## 第74号

## ● 目次 ●

巻頭言「映像研究の可能性と難しさ」	1
佐藤源之教授 電子情報通信学会で喜安善市賞を受賞	2
私の東北アジア研究 「[跋涉]と歴史資料—明治時代の北海道開拓—」	3
東北アジア研究センター公開講演会「座り方と礼の誕生」～東アジアにおける身体技法の歴史人類学	4
第3回東北大学若手研究者アンサンブルワークショップ受賞者の研究紹介	
「アフリカと産学官連携による Ethio-Tabi の創造を目指す実践的地域研究」	5
「福島県双葉郡広野町における作業員と住民との関係の文化人類学的研究」	5
コラム「危ないミネラルウォーターとソビエトビールと敬老愛国落書き—モスクワ郊外で見たロシアの現在—」	6
客員教授紹介	7
活動風景「ロシア研究と国際商業史」	8
編集後記	8

## 巻頭言

## 映像研究の可能性と難しさ

 東北アジア研究センター長  
 高倉 浩樹

最近、研究として映像記録を作ることを行うようになった。現地で撮影してきた動画や写真を編集して作品としてまとめるのである。パソコンでは動画編集がいわば直感的な操作でできるようになっている。小型で手持ちできるデジタルカメラはいうまでもなく、デジタルカメラ、スマホで動画・静止画いずれも撮ることができるので、あとはそれをパソコンに入力すればよい。できあがったものはミニ映画として鑑賞することも可能だし、一部を切り出し学会発表にも使える。授業などで紹介することもあるし、動画配信サービスが使える場合もある。

文化人類学という分野は、異文化・自文化ともに研究するが、その対象の中にはお祭りや儀礼、農作業などがあり、住民がどのように振る舞っているか、その具体的過程が重要な場合がある。

こんなときに映像資料は他にはない情報をもつ媒体といえる。

動画はカメラを回しているショットが一単位となってデータになっていく。編集するとは、その一単位を見て、不要な部分を削除し使える単位に吟味し、さらにその吟味した単位を複数つなげて、全体として意味を明瞭化するということである。例えば、青空にはためく鯉のぼりという単位と、親

子が笑っている単位をつなげるといふ具合である。たくさんあるショットの単位を選び出した上で吟味し、繋げるといふ過程は、人類学の聞き取り調査から論文を書く過程と似ている。膨大な聞き取りデータから調査テーマに適した意味内容を選び出し、その内容をつなげて意味=事例となすからである。論文の場合、さらに分析を加えるという点が変わることが違いだろう。ただ映像の場合であっても、例えばナレーションなどを加えることで分析的シーンを加えることも可能である。

私自身、東日本大震災で被災した地域社会と神楽や生業の調査を続けている。そんなこともあり調査に応じてくれた人々に自分が理解した内容を示せることができるので、映像作品として表現することの有効性を感じている。論文では難しくても映像は親しみやすいからである。ただ問題は、映像作品は学術業績にはなりにくいことである。映像作品を論文と同列にすることは無理である。ただ文化人類学では事例は極めて重要であり、これを研究資料という形として公開できてもいいのではないかと思うことがある。映像人類学という分野では国内・国際学会がある。優れた作品は、国際コンペティションで、学術と映像双方の観点からのピア・レビューの体制が整っている。しかしそこまでいかない日曜大工的な映像づくりを推進し、これを学術として取り込むにはどうしたらいいか、いわば自分の立ち位置の行方も含めて最近悩んでいる。



私の使っている小型ビデオとおすすめの本：分藤大翼・川瀬慈・村尾静二編『フィールド映像術』（100万人のフィールドワーカーシリーズ 15巻）古今書院

## 佐藤源之教授が電子情報通信学会で喜安善市賞を受賞



佐藤 源之



Riafeni Karlina



カンボジアで活躍する ALIS



表彰式 (2017.6.1)

### 喜安善市賞受賞について

2017年6月1日に開催された電子情報通信学会 (IEICE) 総会において、Riafeni Karlina (論文執筆時環境科学研究科大学院学生)、佐藤源之の共著論文 Model-based compressive sensing applied to landmine detection by GPR (IEICE Transactions on Electronics Vol. E99.C (2016) No. 1 pp. 44-51 掲載) が喜安善市賞を受賞した。電子情報通信学会は会員数約 30,000 人の電子情報関係では我が国で最も大きな組織の一つである。本賞は、本年度選ばれた 12 編の論文賞の中から最も優れた論文 1 編に授与される。ちなみに喜安善市先生は東北大学教授も務めた日本のコンピュータ研究の先駆者の一人であり、著者は学生時代喜安先生の「電気回路」の教科書でその基礎を学んだ。

本論文は研究室で開発した地雷検知センサ ALIS に対してコンプレッシブ・センシングのアルゴリズムを利用して効率的に地雷をイメージングする方法を提案したものである。多くの地雷被災国において紛争終了後数十年を経た現在も埋設された地雷による被害は後を絶たず、土地の利用や地域住民の生活に大きな支障をきたし、社会の発展や経済回復の障壁となっている。地中レーダ (GPR) 技術は地雷検知に有効であると考えられてきた。東北大学はハンドヘルド型 GPR センサ ALIS を開発しカンボジアで 80 個以上の地雷を検知したが、数多くの問題を解決しない限り実用的な利用には至らない。その問題の一つはフーリエ変換に基づく合成開口レーダ・イメージングを行う場合、ナイキスト定理を満たす空間的に密なデータを取得するためには GPR データ取得間隔を狭くしなければならず、取得に時間がかかるこ

とであり、また分解能にも限界がある。

本論文は合成開口レーダのイメージングに圧縮 (コンプレッシブ)・センシング (CS) 法を導入することでこの問題の解決をめざした。CS は信号の Sparsity (空疎性) を利用して、こうした限界を打破する技術である。地雷は比較的疎に埋設されており、1 組のレーダデータには数個のターゲットしか含まれないから CS を適用する条件を満たしている。しかし地雷は点散乱体ではなく、また非常に強いクラッタ環境下であるため、CS の適用は容易ではない。

そこで本論文では Model based CS 法の導入を提案している。Model based CS 法は他の CS 法に比べてモデルに適合する対象を的確に推定できる。更に地雷からの電波散乱を幾つかのピクセルからの散乱の集合と見なすブロック構造を導入することで埋設地雷のイメージングに成功した。提案手法は実験室データだけでなく、東北大学がカンボジア実地雷原で取得した実データへも適用することでその有効性を検証した。

本論文ではクラッタの強い実データに対しても合成開口レーダ処理に CS 法を導入することにより、データ取得の高速化と再構成イメージの高分解能化が図れることを実証した点で学術的な意義が高いことが評価され、本賞の受賞に至った。我々が開発した ALIS は小型化による商用化に成功し、今後カンボジアを含む地雷被災国への導入を計画している。本論文の成果は ALIS への実装を予定しており、地雷検知能力を飛躍的に高める方法としての社会貢献が期待されている。

(佐藤源之)

## 私の東北アジア研究

「<sup>ばっしょう</sup>跋渉」と歴史資料 —明治時代の北海道開拓—

荒武賢一郎

今からおよそ150年前の日本では、明治維新が世の中を覆い、政治的変革がおこなわれた。そのなかで戊辰戦争に敗れた東北諸藩は、それぞれの支配する領域が没収されるとともに、配下の武士や領民たちが過酷な生活を強いられたといわれる。とりわけ「賊軍」の中心を担った仙台藩は所領の7割を削減され、藩政機構を支えた武士たちを大幅に整理した。そもそも江戸時代の仙台藩は、住民総人口における武士身分の比率が高く、領内で暮らす人々のおよそ23%が武士だったという。同時代の全国平均が6%という数字であることを考えると、武士の存在が目立っているように思われる。

ただでさえ武士が過剰であったなか、いわば組織存続の頼みの綱として「武士のリストラ」を敢行するわけだが、ここで最も象徴的だったのは陪臣（<sup>ばいしん</sup>臣下の家来、又家来）の帰農（武士から一般庶民になる）政策を即決したことである。明治維新に際しては藩主伊達慶邦の直臣（<sup>じきしん</sup>直参、直接の家来）が約7,000人、陪臣に至っては2万人を超えていた。もちろん直臣は削減の対象になり、帰農を命じられることも多々あったが、最も影響を受けたのは陪臣であり、彼らは士族の身分を与えられずに仙台藩の組織から完全に放逐された。

行き場を失った陪臣たちを救う試みを企てたのは、仙台藩の重臣でありながら陪臣の主人にあたる「殿様」たちであった。仙台藩の「一門」と呼ばれる最上位にいた伊達邦直（岩出山伊達家当主、1835年生～1891年没）、伊達邦成（巨理伊達家当主、邦直の実弟、1841年生～1904年没）たちは自ら北海道への移住を決断し、武士の資格を喪失した家臣団を率いて開拓に邁進することになる。その重臣のひとり、白石城主であった片倉邦憲（1818年生～1886年没）は居城とすべての領地を召上げられ、わずかな米が支給されるのみで、とくに家来たちは陪臣に相当するため、家臣団全体が路頭に迷う状況にあった。そこで1869年に旧片倉家臣団は、1000名以上の開拓志願者の名簿を添えて北海道跋渉の嘆願書を政府に提出することになる。政府はそれに対して、幌別郡（現北海道登別市）の分領支配について認可を与え、1870年7月に第一陣、翌年3月に第二陣が白石から北海道に渡った。

上記に触れたように、当初彼らは現在の宮城県から北海道に渡ることを「跋渉」と表現している。この言葉はあまり聞き慣れないが、『広辞苑第六版』によれば「山をふみ越え、水を渡ること。転じて、諸国を遍歴すること」とある。現在、宮城県の白石市図書館に所蔵される歴史資料「<sup>よろずてびかえ</sup>萬手控」には白石から北海道に向かっ

た第二陣の様子が詳しく書きとめられている。まずもって移住者たちが直面した課題は資金の工面であった。宮城から北海道への旅費、移住にかかる経費、そして入植後の生活費はすべて自己負担で、そのため白石に所有していた家屋や土地を売却し、家財道具や侍の象徴である刀などの武具も手放し、新天地における資金作りをおこなったのである。600人が汽船で跋渉した第二陣の旅費だけで合計金1000両（単純に1両＝10万円換算で1億円相当）という記録がのこる。また移住者たちは跋渉組合を結成し、執事を筆頭に会計係や書記のほか、医師2名も行動をともにしていた。

そのなかに安齋惣十郎という人物が含まれている。先祖代々片倉家の家来筋である安齋は家族7名でこの第二陣に加わり、北海道の白石村（現札幌市白石区）に入って開拓に従事した。この安齋家に関する歴史資料434点は現在北海道博物館で保管されているが、片倉家の家臣であった江戸時代から北海道に定着したあとの昭和に至る多彩な文書を含んでいる。とくに興味深いのは、安齋家の先祖にまつわる書類や、伊達家および片倉家との密接な関係を示す貴重な証文のほか、20世紀になってからもかつての本拠地・白石の親戚や旧友との手紙が大切にのこされていたことである。我々研究者の発想では「宮城の歴史資料は地元にあるはずだ」という意識が先行するものの、明治維新などの戦乱を乗り越え、遠く北海道に伝来する歴史資料に一層の期待がふくらむ。



北海道白石区・白石神社(2016年12月撮影)



白石市図書館「萬手控」：政府（北海道開拓使）が600人の移住を認めた御沙汰書を写す

最近の研究会・シンポジウム等

## 東北アジア研究センター公開講演会 「座り方と礼の誕生～東アジアにおける身体技法の 歴史人類学」(2017年5月26日)

東北アジア研究センターでは、例年5月に東京で公開講演会を開催してきた。本年の講演会は、武蔵大学人文学部の西澤治彦教授を講師とし、東北大学東京分室を会場として、5月26日金曜日15:00から開催された。

西澤教授は、中国をフィールドとする著名な文化人類学者であり、『中国食事文化の研究—食をめぐる家族と社会の歴史人類学』（風響社、2009年）、『フィールドワーカー中国という現場、人類学という実践』（風響社、2017年、共編著）などの主著がある。文化人類学者という同時代的な問題を臨地調査によって研究するスタイルが思い浮かぶが、西澤教授の研究方法は「歴史人類学」という手法に属し、歴史文献を駆使して過去の変遷や動態を含めて人間の文化・社会の特性や普遍性を明らかにして行くというものである。中国は言わずとも知れたように長い歴史を有し、多くの歴史資料が存在する社会なので、それらを用いることによって過去の文化のあり方を究明して行くことが可能であるし、またそうした厚みをもったアプローチをしなければ、現在の文化・社会の様式も深くは理解し得ないことになる。

今回の講演のテーマである「座法」（座り方）と「礼」（相手に敬意を表すための身体作法）は、まさにそのような歴史的な深みをもつテーマである。日本を含めた東アジアにおいて「礼」の基本となるところの、床に跪いて拝する動作は、床の上に直に座っていた古代中国の座法から誕生し、その後儒教式の「礼」が確立する中で定式化されていったことを、西澤教授はレリーフ図像などを含む豊富な古代資料から明らかにした。

その後の歴史の流れの中で、そうした儒教の礼儀作法は日本を含む周辺諸地域に広がって行くのだが、本家本元の中国においては、座法すなわち日常生活の座り方の習慣が宋代以降大きく変化して行く。それまでの「平座」（床に

座る）から「椅子座」へと変わって行ったのである。椅子に座り、机の上に食物や生活用具を並べて生活するようになると、これにともなって「礼」の作法も膝を床に着けずに立ったままの姿勢で会釈するなどの形に変質していったという。

他方、中国から「礼」の作法を取り入れつつも、



西澤治彦教授の講演

日本では明治期あるいは戦後に至るまで椅子・机の生活文化は本格的には定着せず、「平座」が維持された。いわゆる「正座」にしても、「胡座」（あぐら）にしても、板の間や畳の生活空間の中で保たれ続けてきた身体技法である。それゆえに、跪いて拝するという中国古代に成立した「礼」の基本動作は、日本においてのみ今日まで維持されてきたと西澤教授は説明している。床に両膝を降ろして正座の形で行うお辞儀の礼法や、深い陳謝を表すいわゆる「土下座」の身体技法も、古代中国由来の正統的な礼法の流れを汲みつつ、日本の「平座」の生活と共に今日まで維持されてきたものということになる。

このような身体技法は、人々の日常生活の隅々に浸透しているものであるとともに、儀式や社交の場を通じて社会生活の中の身分・年齢秩序や個人間の行動規範と連動しており、人間の文化の中でも極めて規定力の強い重要な領域を構成しているのだが、身体動作であるだけに文書としてマニュアル化されることは希であり、いざ本格的に研究しようとする多くの難しい側面があると思われるが、西澤教授は多くの文献資料を縦横無尽に漁り尽くし、実に見事な論考を展開している。

中国と言えば、最近では経済発展にともなう社会変化の速さや、日中関係の政治的なマターのみがメディア上で強調されるきらいがある。しかし、中国の文化や社会を深く理解するためには、歴史の次元に視野を広げることが不可欠であるし、何より前近代には中国文化は多様な形で日本にも取り入れられ定着していた。その意味では、日本の文化・社会の古層の一部を形成しているのは他ならぬ中国の習慣や制度であり、そうしたわれわれ自身にとっての基礎や古典的部分としての中国文化の理解は、おろそかにすることのできない重要テーマであり続けている。そのことを深く認識させられる講演であった。

(瀬川昌久)



## 第3回東北大学若手研究者アンサンブルワークショップ受賞者の研究紹介

東北アジア研究センターから田中利和、立花理砂の両氏が受賞

田中利和

### アフリカと産学官連携による Ethio-Tabi の創造を目指す実践的地域研究

本研究の目的は、裸足で労働作業をおこなうアフリカの人びとが、よりよい条件で作業するために、労働履物としての「地下足袋」を文化として創造しようと試みる実践の特質を、当事者意識をもつ研究者がフィールドワークをする過程を通じて、解明することにある。アフリカ在来の履物文化と、日本で発明された「地下足袋」文化が、研究者の働きにより有機的に結合し、新たな形でアフリカとの協働によって創造されるというのが、本研究の仮説である。そのため、(1) エチオピア農民を事例に在来の履物文化の実態把握と(2) 労働履物文化の創造にむけた地下足袋の製作、普及のための知識や制度、研究者の役割について具体的に明らかにすることを旨とする。

今回の発表では、現在進行中の4つの研究セッション、「利用」「製作」「流通」「宣伝」の内容を説明したうえで、現在までに明らかになっている、利用と製作に関する調査結果を主に報告した。日本の地下足袋企業「丸五」から研究サ

ンプルとして提供してもらった、30足の地下足袋を、

エチオピアの調査地、オロミヤ州ウォリソの農民へ届けた。その結果、地下足袋は多くの人の関心を惹きつけ、さらなる地下足袋に対する需要を確認することができた。ウォリソにおいて、現地の素材と技術によって、「製作」された地下足袋を、Ethio-Tabiと呼ぶこととし、誕生までの経緯について試作品を示しながら発表した。Ethio-Tabiを労働履物文化として創造していくには、分野をこえた学際的な研究による、現地の履物に関する文化の理解が不可欠である。そのうえで、地域理解を中心にそえた、フィールドワーカーによる、そして産学官連携による、創造の試みが必要である。「丸五」とのこれまでの「産学」連携の蓄積と、今後の「官」との協力の可能性を述べたうえで、実践的地域研究としてEthio-Tabiを創造していく決意について述べた。



立花理砂

### 福島県双葉郡広野町における作業員と 住民との関係の文化人類学的研究

福島県双葉郡広野町は人口約5500人(2011年時点)の田舎町。町内に立地している東京電力広野火力発電所で働く人、北に23km離れた東京電力福島第一、第二原子力発電所で働く企業の仕事人たちが多く暮らす町である。

3.11に伴って福島第一原子力発電所で事故が起こり、町の様子は一変する。町民と同じ数ほどの「作業員」が町に住むようになり、町の旅館やラブホテルは作業員専用、空き地には作業員用宿舎が次々に建設された。道ですれ違う人も、これまではなんとなく「どこの誰か分かる間柄」から、「どこから来たかわからないよそ者」が多くなった。

この「作業員」の存在とは一体、何なのか。これまでの聞き取りで明らかになったことは、広野町に住む主婦の中には作業員を「怖い」と感じ、その存在を警戒し、家に鍵をかけ、娘の送り迎えを必ずするようになる、など彼らが町にやってくる前にはなかった行動をとるようになった人

がいるということである。私はこの

「怖い」という感情が起きる背景や(作業員も含めた)人々の暮らしを文化人類学の技法を用いて探究している。

具体的には、作業員の行動や生活の実態を明らかにしていくことを一つの目標とする。私は2015年8月から10月に、広野町において上水道管敷設工事のアルバイトを経験し、参与観察を試みた。たばこをポイ捨てする仲間を見て「駄目じゃないですか〜」と笑って言っても、知らない「作業員」がするとひどい嫌悪感を覚える。ここで得た知見は、見る立場によって作業員の見え方が違うということだ。

また、最終的な研究目標として、作業員と住民との関係性について、どんな距離感がちょうど良いのか、そのためにはどんなことをすると良いのか考えていきたい。その共生の距離感をこれからも模索してゆく。



## 危ないミネラルウォーターとソビエトビールと敬老愛国落書き —モスクワ郊外で見たロシアの現在—

柳田賢二

筆者はこの8月中旬、ソ連崩壊後に中央アジアから移住したロシア語系住民のオーラルヒストリーを聞き取るためロシアのモスクワ州イヴァンチューエフカ市という小都市に滞在する機会を得た。ここでは、同市ほかのモスクワ郊外の小都市で見聞きしたロシアの現在について記す。

イワンチューエフカはモスクワのヤロスラヴリ駅から30キロ余りしか離れていないが大都市モスクワとは全く違う非常に緑豊かな小都市である。ここには典型的なソ連式アパートに加え経済危機前に立てられた瀟洒な現代建築のほか、ドイツ人捕虜に建てさせたというドイツ風の垢抜けた住居などもあり、本来はのどかで好感の持てる郊外都市であったはずである。

ところが、筆者がこの小さな町を含むモスクワ州の小都市群で目の当たりにしたのは何とも重苦しいロシアの現実であった。筆者が同州ドモジエドヴォ市にある国際空港に着き、現地コーディネーターX氏が用意してくれたタクシーに乗ってすぐに耳にしたのは運転手の「原油安と西側による経済制裁により生活が苦しい。我が国は宇宙ロケットも高性能の兵器も作れるのになぜ生活物資が作れないのか」という言葉であり、その後も、どこへ行こうと会う人ごとに例外なくこれと全く同じ言葉を聞かされた。

そして、筆者自身も買い物に行くたびにこれまで流通していた外国製品にそっくりな粗悪類似品を目にすることになり、地元の人々の嘆きの理由を嫌と言うほど思い知らされた。例えば、ラトビア産の燻製魚の缶詰は実に美味なのでソ連時代から好まれてきたが、EU加盟国となったラトビアに対しロシアが「報復制裁」をかけ、魚の缶詰を輸入禁止にしたため缶のデザインをラトビア産そっくりにした類似品が横行している。X氏によると「食べられなくはないが不味い」とのことであった。この缶詰は食べられるだけままだしである。筆者が最も衝撃を受けたのは、ロシア産の「危ないミネラルウォーター」との遭遇である。筆者がミネラルウォーターを買おうとするとX氏はしきりにアルメニアやジョージアの水を勧めた。筆者もウォッカについてはこれまでも常に警戒し、現地のロシア人が愛飲しているブランド以外は買わないことにしていたが、ことミネラルウォーターについては警戒する必要を感じなかった。アルメニアやジョージアの水は味にかなりクセがあるので「ロシアの水で十分だ」と押し切って1本買ってみた。X氏とともに宿舎に帰り、これをごく少量口にただけで「何らかの化学物質が混入している」と感じ、気分まで悪くなりかけた。X氏にも試

してもらったところ、やはり「この水を飲むことは勧められない」とのことで、すぐさまトイレに流した。ところが、その薬物臭がトイレに充満してしまい、水道の水を流してようやく消えるという有様なのである。X氏によれば「このブランドは半年くらい前までは大丈夫だった」とのことであり、現在のロシアでは水のブランドすら信用できない。

こうした経済苦に直面し、それがウクライナを支持する西側の経済制裁に起因するものであり、しかも連日連夜反ウクライナのプロパガンダを聞かされれば、「反西側」、「ソ連回帰願望」(写真1)に加え、危険な「愛国主義」が発生するのも当然のことである。筆者は日本でいう「ヤンキー」の類が書いたとしか思えないスプレーによる落書きに「爺さんに(対独) 戦勝への感謝を！」(写真2)とあるのを見て甚だ驚いたが、X氏によれば、「最近では愛国主義の高まりによりこういう落書きが至る所にある」とのことであった。



写真1 「ソビエトビール 輸出用」なるブランドのビール。いかにもソ連風のデザインだが、実際のソ連時代にはこのようなビールはなかった。



写真2 「爺さんに戦勝への感謝を！」

クリミア併合およびロシア・ウクライナ対立についての我が国の論調を見ていると、中世以来のロシア史どころか独ソ戦も戦後を含むソ連時代の経緯も全く考慮に入れずに「大国ロシアの横暴」を非難するものが数多く見受けられる。確かにロシアにおける反ウクライナプロパガンダは耳を覆いたくなるほどに執拗である。しかし、ウクライナにおいて行われている反露プロパガンダも執拗さと荒唐無稽さにおいてロシアのプロパガンダに劣らない。ロシアほどの大国の国民にとってさえ「経済制裁」とはかくも辛いものであり、しかもそれはロシア・ウクライナ両国どころかEUにとどまらず全世界にとって危険なことなのである。我々日本人はこのことを十分に認識した上で行動する必要があるのだということを、筆者は同地のロシア人の微妙な対日感覚から実感した。

東北アジア研究センターには、世界各地から東北アジアの研究を手掛ける専門家が客員研究員（教授・准教授・研究員）として来日され、私たちと一緒に共同研究などを進めています。



●客員教授  
ツァイ チンホウ

ツァイ（蔡）先生は1967年台湾（中華民国）台北市生まれの台湾人です。1990年に国立台湾大学を卒業後、スタンフォード大学（米国カリフォルニア州）の大学院に留学し、1998年に中国大別山地域の超高压变成岩に関する研究で博士号を取得しました。その後、国立台湾大学で博士研究員を勤めた後、国立花蓮大学（現、国立東華大学）の助理教授（日本の助教に相当）に着任し、現在、同大学の副教授（日本の准教授に相当）を務めています。世話役教員（辻森）とは、スタンフォード大学に共通の恩師をもつことがきっかけで、2007年以降、学术交流を進めてきました。蔡先生はこれまでに日本で開催された国際シンポジウムに複数回招かれたほか、辻森も蔡先生の招待で台湾を訪問し、国立東華大学で特別講義とショートコースの講師を務めています。国際会議のセッション起案・運営に加え、国際学術雑誌の特集号ゲストエディターとして共同編集するなど、見える形で学術活動を行ってきました。

台湾は狭義の東北アジア地域からは外れるかもしれませんが、国際的な学术交流を進める上で重要な国の1つです。蔡先生はアメリカで博士号を取得したこともあって、アジア・欧米に幅広い学术交流のネットワークを築かれてきました。中国の研究者とも友好関係を築いておられます。蔡先生のようなグローバルな国際感覚を持った研究者の招聘は、東北アジア研究センターの国際学术交流の発展には欠かせません。滞在期間中、蔡先生は台湾の軟玉（ネフライト）産地として有名な玉里變成帯から発見されたオンファス輝石岩と含オンファス輝石斑れい岩についての研究を進めながら、「東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット」に係わる研究と教育に積極的に関わっていただきます。文理融合型の学際研究の新しい可能性を模索しながら地域研究のネットワークの発展を目指します。

（辻森 樹）



●客員教授  
ボニフェイス  
ネルソン ムリサ

ボニフェイス（Boniface）先生は1974年タンザニア連合共和国キゴマ州生まれのタンザニア人です。2001年にダルエスサラーム大学を卒業後、2004年に同大学院で修士号を取得、キール大学（ドイツ）の大学院に留学し、2009年にキール大学地質科学研究所においてタンザニア東部の原生代の変成作用とテクトニクスの研究で博士号を取得されました。その後、祖国に戻ってダルエスサラーム大学の講師に着任され、現在は同大学上級講師を務めながら、地質学科長、そして学部教育担当の副理事を兼務されています。ダルエスサラーム大学は1966年創立の旧東アフリカ大学の1つで、東アフリカ共同体5カ国を代表する高等教育としてタンザニアの国内外に人材を輩出してきました。先生はタンザニアの地質と鉱産資源の研究の将来を担う人材としてドイツ学術交流会の奨学生として、外国で博士号を取得した国際派です。世界で最も古いエクロジャイトの1つを発見したことで知られています。世話

役教員（辻森）とは2012年以降、共同研究を行ってきました。2012～2014年度科研費基盤研究B「大陸地殻の改変と構造侵食の実像：タンザニア地塊外縁造山帯約15億年間の変遷解読」を先駆けとして、最近では2015～2017年度科研費基盤研究B「現行型沈み込み帯出現の地質学的証拠：古原生代、高圧中間群變成帯の総合研究」の協力研究者として一緒に野外地質調査を実施しています。

ボニフェイス先生の招聘は東北アジア研究センターの国際的な学术交流と人的なネットワークをよりグローバルに展開するものです。センターの地域研究に携わる専門家との交流を積極的にはかることで、グローバルな地域理解の価値観の創造と共有が期待されます。また、将来の研究拠点形成事業「アジア・アフリカ学術基盤形成型」（旧「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」）の構想と一緒に練る良い機会になると願っています。

（辻森 樹）

活動風景

## ロシア研究と国際商業史 塩谷昌史

2017年の前半に関わった活動について記してみたい。私はロシア研究が専門だが、最近では帝政ロシアの統計制度の歴史についての研究に取り組んでいる。私はこれまで19世紀のロシアの経済統計を使って、ロシアの工業化を研究してきた。その際、なぜロシア政府が国内の統計データを整備したのかに関心を持った。政府が政策を立案する際、国内の基礎データが必要になるため、政府は官僚機構を通じて、国内の情報を収集する必要がある。私の仮説は、統計制度は国内統治のためという考えである。この仮説を検証すべく、ロシアが19世紀に内務省の中央統計委員会を中心に、国内の情報収集システム（統計制度）を整備した過程を調べている。

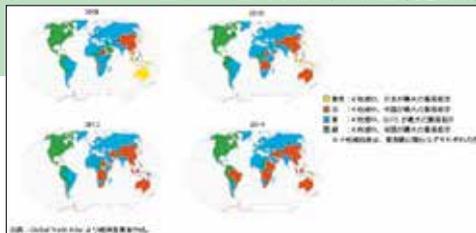
これに関連する資料収集で、1月下旬から3週間程度、ロシアのサンクト・ペテルブルクに滞在した。現在、欧米諸国はロシアに経済制裁を行っているため、ロシアのルーブルは米ドルに対し下落しているが、国内のインフレはそれほど進行していない。ロシアはヨーロッパの農産物輸入を禁止しているが、スーパーの棚に農作物は豊富に並ぶ。欧米が期待したほど、ロシアへの経済制裁の効果は上がっていないようである。

2017年度の前期に、高度教養教育・学生支援機構が企画した、「アジアを知ろう、感じよう」というオムニバス授業が開講された。アジア地域の研究に携わる研究者が、それぞれ1回分の授業を分担する形式であった。中川学先生（高度教養教育・学生支援機構）から1回分の授業を担当するよう依頼された。私は6月27日の5講時に「アジアの風土と文化」という題で授業を行った。受講者数は30名程度であり、理系の学生が多かった。ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』を切り口に、梅棹忠夫やマッキンダーの歴史モデルを紹介し、産業革命から現在までの経済史の概略を説明した。産業革命の後、経済の重心がアジアから大西洋、太平洋へと移動したが、現在、経済の重心が再びアジアに回帰する動向に触れた。最後に『通商白書』の図表を示し（写真1）、中国の経済的影響力が世界的に高まっていることを示したところ、驚きの声が上がった。授業後に学生からのコメントを見ると、興味を持って授業を聞いてもらったことがわかり、嬉しく思った。

私は十数年前から国際商業史研究会に参加している。これは、対象地域は違っても、国境を越えたモノや商人の動きを研究する、歴史研究者の情報交換の場である。この研究会の代

第I-1-1-3-1表 日本・米国・EU15・中国のうち最大の貿易相手国（地理的分布）

経済産業省  
『通商白書』  
(2017年)  
より



表者は深沢克己先生（京都産業大学）で、元来フランス史が御専門であるが、更紗を通じてアジアとヨーロッパの関係を長らく研究されてきた。この研究会には、

川分圭子・玉木俊明編『商業と異文化の接触』吉田書店（2016年）



ヨーロッパ史の研究者だけでなく、中近東や東南アジア、アメリカ大陸等、メンバーの対象領域を重ねれば、地球のほぼ全域を覆う。この研究会のメンバーが協力して、7月に吉田書店から『商業と異文化の接触—中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開』を刊行した（写真2）。私も一つの章「19世紀前半における露清貿易に携わったロシア商人の動態」を寄稿した。総勢30名の執筆で、総ページ数は897頁に及ぶ、とても重厚な本に仕上がった。東北大学図書館に収められたので、近世から近代にかけての国際商業史に関心を持っておられる方は、ぜひ閲覧されることをお勧めしたい。

地域研究を連携する組織として、地域研究コンソーシアム(JCAS)という機構がある。地域研究を推進する、全国の機関が90以上加盟している。東北アジア研究センターも、このJCASに加盟している。私はJCASの運営委員であるため、定期的にJCASの会議に参加している。JCASでは年に一度、年次集会和シンポジウムを行っている。今年は10月28日（土）に東北大学で開催されることになっており、現在、コラボレーション・オフィスと共に準備を進めている。シンポジウムは「フューチャー・アースと地域研究者の協力の可能性」という内容である。講演者として井上真先生（早稲田大学人間科学学術院）と安成哲三先生（総合地球環境学研究所）をお招きし、コメントをセンターの石井敦先生が担当される。10月28日の午後4時～午後6時に川内キャンパスB棟200教室で、このシンポジウムが行われるので、御関心のある方には聴講していただければ幸いです。

編集後記

東北アジア研究センターの研究者が日頃努力を重ねている成果が、さまざまところで評価されています。専門学会などにおける受賞は本当に嬉しい限りです。また、本号では調査・研究に関する内容を執筆者にご紹介いただきました。ぜひご一読ください。  
(荒武賢一朗)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第74号 2017年9月29日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

